

## 納豆アレルギーを予防する

### ☆推薦文☆

黒鳥先生は、北の大地の港町で自治医大の卒業義務を履行するなか、一つの疑問を抱き仮説を立て、地元で溶け込んで地道に聴き取り調査を行い、そして実証しました。さらにその論文が一流の国際誌に掲載されました。黒鳥先生がとちぎ子ども医療センターの心の診療科で研修をされていたとき、私は一緒に患者さんを診療したことがありました。今回ご縁があって黒鳥先生の素晴らしい研究に携わる機会をいただきました。黒鳥先生は誠実で実直、寛大で謙虚なドクターで、常に真心と配慮を持ち合わせています。一方、研究に対しては探求心と熱意に溢れていました。本研究調査は北海道大学公衆衛生学教室の指導を仰ぎながら行われましたが、黒鳥先生の真摯な姿勢とコミュニケーション能力、そしてバイタリティがなければ成し得なかったでしょう。研究成果は、アレルギー学だけでなく産業医学的にも非常に価値のあるものであり、こうした卒業義務年限中の派遣先での偉業は、学生や若手医師の良いお手本であります。

小児科学講座 熊谷 秀規

### 道立羽幌病院 黒鳥 偉作 (神奈川県 32期卒業)

地域住民の一員となり喜びや悲しみを共有しつつ、共に生きることで、新たな視座に導かれることがしばしばあります。その視座は、“病める人の立場に立って診る”と教えられた卒業生だからこそ得られるもの、と信じています。

日本海に面する北るもい地域は、南北150kmの留萌管内の北に位置する、漁業や農業、酪農が大変盛んな地域です。一方、冬は豪雪地帯となり、吹雪などにより陸の孤島となることもあります。当該地域にある道立羽幌病院は、自治医大卒業生が継続して派遣されてきた場所です。長年にわたる地域医療支援によって、一朝一夕にはいかない住民との信頼関係が築かれてきました。現在も、阿部昌彦院長（北海道6期）、佐々尾航副院長（北海道29期）が当院に残り、後進の指導を担いつつ地域を守っています。また、職員も地元出身者が多く、当該地域のために貢献しています。さらに、羽幌町内の民間団体などによって設立された地域医療を守る会「折り鶴」により当院は支えられ、相互的な関係性を維持しています。このような信頼関係があるのは、卒業生が病める人の側に立った医療を絶え間なく提供してきた証といえます。

さて、当院では、納豆アレルギーという極めて珍しい食物アレルギーを発症する患者さんがいること、しばしばアナフィラキシーショックを引き起こし、かつ、重症化することが以前から言われてきました。納豆アレルギーのアレルゲンであるポリ-γ-グルタミン酸 (PGA) は消化管吸収が遅いことが知られており、そのため、納豆アレルギーは納豆を摂取後遅発的に発症し、さらに遷延するという特殊な病態を呈します。最近になって、PGAを含むクラゲ刺傷によって納豆アレルギー引き起こされ、クラゲ刺傷のリスクが高いサーファーなどのマリンスポーツにリスクがあるという報告が出てきました。しかし、北るもい地域はマリンスポーツが盛んな地域ではありません。さらに、当院では納豆アレルギーを発症する患者さんにホタテ漁師さんが多いということが言われていました。納豆アレルギーに関する先行研究と当該地域の伝承に矛盾があり、また、臨床の限界を乗り越えたいと思い、研究への道を模索しました。

研究を開始するにあたり、漁師さんなどから漁業の種類やスケジュール、具体的な作業などの教を請いました。私は漁業に携わる患者さんを多く受けもっていましたが、その業務や生活について何も理解していなかったことに気づかされました。とくに、北るもい地域がホタテ稚貝養殖の日本最大の産地であること、ホタテ

養殖のために特殊な網を使い、素手で扱わざるをえない細かい作業があることなど、実際の作業を見学させてもらいながら深く学びました。その上で、カルテを改めて振り返り、リスクを再検討した結果、納豆アレルギーをもつ患者さんは、経験的に言われていたホタテ漁師さんではなく、ホタテ養殖の何らかの作業に関係していることが考えられました。

次に、研究のために北海道大学公衆衛生学教室の大学院生となり玉腰暁子教授に師事しながら、当該地域の漁業従事者にアンケート調査を行う計画を立てました。しかし、多忙な漁師さんのご理解とご協力を得るのは大変難しいことであり、途方に暮れました。そんなとき、相談に乗ってくださったのが北るもい漁業協同組合の蝦名さんと村上さんでした（写真）。お二人は話し合いの機会を何度も作ってくださり、最終的に漁業組合の全面的なバックアップのもと、アンケート調査の説明、参加のお願い、配布、回収を行いました。お二人のご支援がなければ調査を行うことは不可能でした。

研究のすべてにおいて、自治医科大学小児科学の熊谷秀規教授（岩手県14期）からご指導をいただきました。経験的な臨床の知や仮説に誤りが無いとはいえず、食物アレルギーに精通している専門家の助言は不可欠と考えていました。しかし、一流の方と知り合う手段や機会がなく、誰にも相談できずにいました。そのときに、CRSTなどを通じて熊谷教授につながることができました。熊谷教授は、初学者である私の拙い質問ひとつひとつに丁寧にお答えくださいました。また、些細な悩みなども相談にのっていただき、心折れそうなときも励ましてくださり、研究をやめようと思ったときも支えてくださいました。大変ご迷惑をおかけしましたが、研究者として、教育者としてのあるべき姿を学びました。

構想を含め3年以上かかりましたが、ようやくAllergology Internationalにアクセプトされ当研究の成果を出すことができました。漁師さんが普通に仕事をしたり、ホタテを食べることや触れることに納豆アレルギーのリスクはないこと、ホタテ養殖に潜在的なリスクがあるものの素手で網を触らないことで納豆アレルギーは予防可能であることを示すことができました。そして、今もなお納豆アレルギーに苦しむ方に対しては、回復の糸口になりえる結果を提供することができ、大きな意義を感じました。

限られた地域の、小規模の本研究ではありますが、卒業生の活躍、地域住民との信頼関係、研究に関心を寄せ支えてくださった熊谷教授からの支援がなければなしえなかったと思います。“病める人の立場に立つ”という理念をもつ自治医大の末席に連なる一人として誇りたいと思いますし、これまで道立羽幌病院に関わってくださった卒業生、そして、地域住民の方に深く感謝を申し上げたいと思います。



<写真>向かって右から阿部院長、北るもい漁業協同組合の蝦名さんと村上さん、筆者。許可を得て掲載。